
未雨

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未雨

【Zコード】

Z5928B

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

未だ雨は降らず、一人っ子で鍵つ子な私のちょっとだけ憂鬱な事情。

原色の青で泣く空が、時折見せる嘘の表情に戸惑つて、忽然と姿を消した子供達の残像が霞んでいた。

私は、一斉に蜂起した背高泡立草の蔭から、一人でその様子を窺つてみたものの、迎えにくる母親は七時にならないと帰つてこない事を知つてゐる。

もちろん鍵は持つてゐる。小学四年に上がり立てる頃、兎のマスクの下がった家の鍵を持つ事を許されたのだ。

しかし、誰も居ない家のリビングは、まるで呼吸をしない草食動物のように、不気味で無機質な雰囲気を私に与えた。

遅くなる時は、親戚のおじさんの家に行くように指示されていたが、私にとっては、他人の家族の中で平然と家族の様に馴染む事は苦痛でしかなかつた。

なによりも嫌なのは、おじさんの本当の子供であるワカナが居る事だ。

紛れもない本当の子供であるワカナを見ていると、私は偽物だといつ意識を抱いてしまうのだ。

ある日突然、ワカナが死んでしまえばいいのにと思つた後で、私は酷い罪悪感に襲われた。

鍵を持つようになつてからは、私は一度とおじさんの家に行つていない。

公園は、田舎のこの町ではそれほど大きくないにしても、滑り台やブランコといった遊具は一通り揃つていて、砂場も小さいながら造られている。

遊具がある付近の大部分の地面は、綺麗に整理されているが、入り口以外のフェンスの周りには、未整理の雑草地帯が残つてゐる。私はその、見捨てられた雑草の林の中がお気に入りで、農薬が入

つていたと思われる、比較的綺麗なビールを敷いて、そこに座る事が多かつた。低学年の子供達と遊ぶのに疲れると、いつも私はその秘密の場所で休むのだ。

私は他の同年代の女の子達に比べると虫や蛙などがそれほど嫌いじやなかつた。今まで平氣で、土遊びをしていた女の子達が急に虫を怖がりだしたのを不思議に感じていた。

学校では、よく喋るグループに入つていて、それ以外では年下の子とよく遊んだ。近くに同じ学年の子供が住んでいなかつた事も、関係していたかもしれない。

考え事をしていると、いつも自分が何処に居るのかを忘れてしまう。忘れてしまえる事で、私は幾らか救われていたのかもしれない。

時計の針は進まない。本格的に雨が降りだす前に、私は秘密の場所から立ち上がつた。

月日が経つごとに狭くなつていく公園を、今では向こう側まで見渡せる。

誰も居ない。誰かが居て欲しいと願つてしまつてはいけない。そうすれば、最も心の弱い部分が警戒しようと私に囁く。

雨はまだ降らない。雨が降るまでは泣くのは止めると私の肩が震えた。

そして、長い間待つていた雨が降りだすと、私は誰も居ない家へと帰るのだろう。

そうすれば、この公園には、本当に誰も居なくなつてしまつ。だからもう少しだけ、私の居るこの公園で、せめて雨が降るまでは、この曇り空を見ていたい。

もう少しだけ強くなりたいと自分の背丈程になつた泡立草を踏みつけてみたが、泣きたい気持ちは巨大な湖に広がる波紋のように静かに大きくなるだけだつた。

その日は結局、雨は降らなかつた。

「明日、雨なら良いのに

と聞こえないよう母に言った私の心は、何処にも行けない曇り空を作り続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5928b/>

未雨

2010年11月27日20時27分発行